

一 再会

さて、これからは慎子のニシーズン目の紹介になるが、その前に、一九九八年の夏、鶴鳴（平成九年に長崎女子高校と改称）が、エバンスビル大学に遠征した時の様子をお話ししなければならない。鶴鳴は、一九九五年に初めてアメリカ遠征をした。その時、三年毎にアメリカ遠征をすることにしようと思った。三年毎にすると、選手は誰でも、在学中に必ず一回は、アメリカ遠征をするチャンスが回ってくるからだ。一九九八年の夏はそれから三年目で二回目の遠征をする年である。それを知っていたキャシーは、忙しいスケデュールを調整して、この期間だけは私たちのために空けておいてくれた。七月下旬というのは、デイヴィジョンのチームは、リクルートの追い込みでキャンプどころではない。それなのにキャシーは、慎子と私たちのために全てのスケデュールを調整し、受け入れ態勢を整えておいてくれたのである。私たちは、キャシーの特別の計らいで、一年五ヶ月ぶりに慎子と再会することになった。以下はその時の報告書である

一九九八年 日米親善バスケットボール研修報告（一九九八年八月四日付）

一 参加者	女子	長崎女子高校	二九名	男子	徳島城北高校	十二名
		徳島城北高校	十六名		会津高校	二九名
		徳島城東高校	一〇名	総計		九六名

二 旅 程 十七日 移動 関西空港ーロスアンジェルス

十八日 ロスアンジェルス観光（サンタモニカ・UCLA・ハリウッド）

十九日 ロスアンジェルス観光（ピバリーヒルズ・デイズニールランド）

二〇日 移動（ロスアンジェルス ルイビル エバンスビル）

二一日 クリニック（個人技とチームディフェンス）

二二日 クリニック（スクリーンプレイ対策とスクリーメージと筋力トレーニング）

二三日 クリニック（オフフェンス&ディフェンス復習）

二四日 終日トーナメント

二五日 終日トーナメント

二六日 移動エバンスビル ミネアポリス シアトル 関西空港

三 宿泊所 観光中（ホテル二泊）アナハイム・ホリデイ・イン

研修中（大学寮五泊）エバンスビル大学のプレントナーホール

四 試合結果（鶴鳴関係のみ）

「予選リーグ」三勝一敗で二位

鶴鳴 五〇―五四 TOP RECRUIT AAU

鶴鳴 六八―三八 DAVID DUREY

鶴鳴 七六―十六 GARY COOK

鶴鳴 六六―六二 RIVER CITY ROCKERS

「二位グループリーグ」四戦全勝で二位グループ優勝

鶴鳴 六五十四〇 SOUTHERN INDIANA AAU
鶴鳴 五四一四三 CENTRAL RED RAIDERS
鶴鳴 六三三四一 DIAMONDS
鶴鳴 六七一六一 OWENSBORO CATHOLIC

AAUというのは、各チームから優秀選手を選抜して作る特別のチームのことです。

今回のアメリカ側チームは、前回よりも強いチームが多く、また、単独チームではなく選抜チームが多かったので、個人的に優れた選手が目立ちました。初戦で当たったチームが結局優勝したわけですが、初戦で鶴鳴が負けたのは、私が、アメリカの高校生のルールをよく調べていなかったからでした。

私は、TOP RECRUITは手強いチームだとすぐわかりました。個人的にも優秀な選手がいますし、チームとしてもバランスが取れています。ですから、ゲーム開始からずっと鶴鳴はリードされっぱなしでした。こちらが組織プレイでやっと点を取れば、あちらは個人技でガッツと点を取ってしまいます。そんなやりとりで、六点から八点のリードされたまま後半なかばまで進みました。しかし、こちらも今回のツアーの主旨です。意地でもそつ易々とは勝たせられませぬ。後半一〇分過ぎにギヤダウンして加速をつけ、追い上げにかかりました。プレスディフェンスを仕掛け、速攻を出し、残り六分で遂に逆転。さらに残り五分の時点では四点差をつけてしまいました。

その後もつたいないシュートを落として同点に追いつかれたものの、試合の流れはもうこっちのものです。私は、同点に追いつかれたことは気にせず、強気で攻撃するよう、選手に指示しました。ところがこの後、こちらがまたシュートを落とし、逆に相手に一ゴールリードされると、相手チームは途端に攻めて来なくなつたのです。まだ試合時間は残り三分もあります。私はハッと気がついて審判に、「シヨットクロック（ボールを得てからシュートを打つまでに三〇秒以上経過したら反則になるというルール）はないの？」と聞きました。審判は肩をすくめて両手を広げます。「気の毒だけど」とその顔に書

いてあります。アメリカではどの州でも、高校生以下の試合はシヨットクロックを使用しないのです。慌てた私は、「ファウルゲーム！ファウルゲーム」と叫びましたが、セブンファールまでにはまだまだ遠く、おまけにファウルゲームなどには慣れていない選手たちは、ダブルチーム（二人がかりでボールを持っている戦手をつぶしに行くこと）にいつてもファウルを避けて当たります。結局三分間、ずーっとストーリーング（攻撃しないで外側でパスを回すだけのプレイ）されて負けてしまいました。

初回の遠征の時には、ほとんど大差のゲームばかりだったので、三〇秒を気にして試合することなどありませんでした。でもたぶん、初回の遠征の時もシヨットクロックはなかったのだと思います。私はこの日の夕方、クルマで十三時間もかかるウイスコンシン州のクレイトンから手伝いのためにかけつけてきた、コーチ・ランガムに質問をしました。

「アメリカではどの州も高校生は三〇秒計時を使わないの？」

「そつ、高校生以下はすべてシヨットクロックを使わないんですよ」

「公式戦も？」

「ええ、すべての試合がそつです」

「なぜ？」

「うーん、多分、体育館にそれだけの設備を備えるとなれば、学校に負担をかけるからでしょう」

私はこの回答には納得しなかったし、私のヒヤリングが貧弱でそのように解釈してしまったのかもしれないと思ひ、そのことには突っ込まずに次の疑問を投げかけました。

「でも、それじゃオフエンス力が発達しないでしょ。だって、最初の一分で一ゴール先取したら、あと三九分間ずっとストーリーングしていても勝てるわけだから…」

「そう、私もそう思うし、そう思っているコーチはアメリカにもいる。多分、数年のうちにはこのルールも変わると思っよ」

エバンズビル大学のアシスタントコーチのマット・ボラントに、ルールのことを尋ねた時もうでしたが、アメリカのコーチすべてが、アメリカで行われているスタイルの理由を明確に知っているわけではないし、またアメリカのやり方に疑問を持っていないわけではないようです。

五 感 想

クリニック

クリニックの内容のひとつひとつは、他のコーチが行うことと大差ありません。ただ、要点を示す時のキャシーの迫力と、デモンストレーションをしてくれた選手ひとりひとりの、頭のとっぺんからつま先まで、神経網が張り巡らされた集中力はすばらしいものでした。

試合

参考になったのは、やはりインサイドプレイです。強いチームはもとより、私たちの方がダブルスコアで勝つような弱いチームでさえ、インサイドの位置取りと、そこへのパスの技術では、一本取られたという場面がしばしばありました。我々が見直さなければならぬプレイのひとつだと思えます。

もうひとつ驚いたのは、スリーポイントシュートでは負けなと思っていたのに、今回はその部門でも負けた場面があったことです。私は、アメリカの女子選手は、男子選手のプレイスタイルをそのまま取り入れているので、アウトサイドシュートの確率が悪いと思っていました。具体的に言つと、スリーポイントシュートをワンハンドのジャンプショットで打とうとするので、男性にくらべて筋力の弱い女子選手は、バランスが崩れると思っていたのです。

そう思っていたのに、今回対戦した相手のチームには、ワンハンドのジャンプショットではなく、ワンハンドのセットシュートを打つ選手が多数いました。そしてその選手たちは、ほとんど全員、確率の高いスリーポイントシューターでした。このような選手に出会うと、アウトサイドのシュートもやっぱりワンハンドがよいのかなあと迷ってしまいます。

総括

初回の遠征でもそうでしたが、何よりも感動させられたのが、キャシーはもちろん、三人のアシスタントコーチと、応援に駆けつけた卒業生数人と、ボランティア参加してくれた近隣ハイスクールのコーチたちの、献身的な働きぶりでした。この人たちが、クリニックの実技指導、宿舎や食事の世話、試合の準備や後始末、それに試合の審判も含めて、まさにコマネズミのように働きます。しかも、椅子運びなど、選手をアゴで使うのではなく、自ら率先して行うのです。

私たちは、彼らの労に対してももちろんお金を払って参加しています。しかし彼らの態度は、お金を貰ったからそれに見合う仕事をしているんだという感覚ではありません。誠心誠意なのです。もちろんそれは、キャシーの人柄が多分に影響していると思いますが、アメリカ人の気質そのものがその根底にあるのだと私は思いました。日本には、目上の人を敬うという、儒教の精神に基づいた人格形成のためのよい習慣があります。しかし、それがスポーツの世界では履き違えられていて、若者をアゴで使うという習慣として定着してしまっています。襟を正して見習わなければならない姿勢だと思えます。

慎子

大野慎子はとても元気でした。スタッフからもチームメイトからも、とても愛されているということがすぐにわかりました。コーチ・ベネットは、「試合で負けたり、練習がうまくいかずに落ち込んでいた時、慎子の笑顔を見ると勇気が湧いてきます」と私に言いました。これは、お世辞ではなく彼女の本

音だと思えます。

クリニック期間中の慎子はとても忙しそうでした。クリニックの通訳、選手たちの世話、プレイのデモ、売店の当番、日本の選手たちからの質問やサインの要求に対する応対などでゆっくりしている暇はまったくありません。でも笑顔を決やさずによく働きます。しかも、クリニックの中休みや終了後、少しでも時間があるとボールを持ち出して練習をします。意欲と研究心のかたまりです。ガイさんはそんな彼女を「GYM R A T」と言いました。

慎子は、TOEFL（英語力テスト）とSAT（学力テスト）の両方とも、今回落ちたら一年後に再挑戦しなければならないという状況で合格しました。キャシーは、「慎子はとても賢い」と言います。それは私も同感です。ではなぜTOEFLやSATがぎりぎりの合格だったのかというと、ひとつには、慎子が三年生になってから急にアメリカ留学を考え、何も準備しないままアメリカに渡ったからです。もう一つは、日本の英語教育が、生徒の英語力を引き上げるものではなかったからだと思います。

本校には国際教育委員会という組織があり、毎年、生徒のイギリス語学研修プログラムを実施しています。しかし、このプログラムだけでなく、個人としても外国に留学したいという生徒は今後必ず増加するはずですから、本校独自のコース制の中に位置づけるか、または、補習や特別プログラムとして設置する方法で、生徒が、高校三年間の在学中に、TOEFLの点数をいくらかでも獲得できるようにならないものかと真剣に考えました。

慎子は、「ホームシックになったことは一度もありません。ただただ、TOEFLとSATの点数のことだけしか頭の中にありませんでした」と言いました。慎子はたくましい子です。現地の新聞に掲載されたように、今シーズンは、遠征試合でも地元の試合でも慎子は注目され、バスケットの人気を高めることは間違いないでしょう。

以上は鶴鳴の二回目のアメリカ遠征の報告だが、この遠征は、慎子のことでもあって地元マスコミでの取り上げられ方も初回とはずいぶん違った。次に、カラー写真入りで第一面に取り上げられた地元新聞の記事を紹介しよう。インタビュで答えたことと少し違って書かれていたり、私の翻訳があやしい箇所があるが、それは読者の想像力でうまく処理していただきたい。

バスケットボールの情熱が遠く広く駆ける

コーチ山崎は、野球と相撲が人気スポーツとなっている国に住んでいる。バスケットボールが、マイケル・ジョーダンという名前とともに知れ渡るものでなかったならば、日本人にとって、バスケットボールは珍しいスポーツであったかもしれない（私はこんなコメントはしていない）。しかし、五六才のコーチ山崎は、アメリカの中で最もバスケットボールに対して熱心な、インディアナ州の人々を感銘させるほど、バスケットボールに対する情熱に溢れている。

コーチ山崎はしばしば、初めて逢ったインタビュアーの私に説明する時でさえ、要点を示すために立ち上がって話したり、大きなゼスチュアを交えて、言いたいことを伝えようとする。だから、彼の話すことが日本語であっても、彼のバスケットボールに対する愛着は、記者の私にも充分伝わってくる。

「バスケットボールは、どんなに研究してもまだまだわからないことがたくさんあります」
「バスケットボールについて、学ぶべき事や知らない事は非常にたくさんあります」

エバンズビル大学主催のキャンプで、コーチ山崎はこう言った。

コーチ山崎は、過去、自分のチームを二回全国大会で優勝させている。彼は、今週エバンズビル大学のカーソン・センターで行われるチームキャンプに参加するため、日本からやってきたのである。

「帰りたくないよ」

「できることならここに住みたいよ」

コーチ山崎はそう言った。

彼は、バスケット狂ばかりのインディアナ州と完全にマッチしているようだ。これが、彼にとっては初めてのエバンズビル大学訪問なのだが、この旅は、コーチ山崎にとっては故郷へ帰ってきたような感じがするらしい。彼は、エバンズビル大学のコーチであるキャシー・ベネットととても気が合うようだ。彼は、キャシーがウイスコンシン大学オシユコシユ校のコーチをしていた頃、一九九五年のサマーキャンプで彼女に出逢った。

「彼のチームは、すばらしいパッシングゲームをするわよ」

「攻防の素速い変化の中で、鶴鳴の選手達はひとたび自分たちが優位になったら絶対ミスすることなく、確実にそのチャンスをものにするわよ。見ていて美しいわ」

コーチ・ベネットはそう言った。

コーチ・ベネット（三五才）はまったく日本語を話せないが、言葉が通じないということや、年齢の違いにもかかわらず、この二人はすぐさま親しい友達になった。二人に似ている点に気付くことは簡単だ。コーチ・ベネットもまた、熱が入ってくると大きなゼスチャーを交えて、全身で話すことで知られている。

「バスケットボールは私たちの心の中を占領しているの」

「これは、私たちがとても愛しているものだし、情熱のすべてを注ぎ込めるものよ」と彼女は言った。

長崎国際交流企画のオーナーである、ガイ・W・ヒーリー氏は、三年前、ウイスコンシン州オシユコシユでのバスケットボール日米交流プログラムをコーディネートした。それが大成功だったので、彼はまた、今回の企画をコーチ・ベネットに持ちかけた。コーチ・ベネットが、快くこれを引き受けてくれたので、そのお返しに来年の夏、エバンズビル大学の女子チームが日本へ遠征する企画一切を、彼は引き受けた。

「この二人は同じことばは話さないが、お互いのスタイルを好きなのです」

「二人は個人的にお互いを賞賛しあっています」

ヒーリー氏は二人のコーチについてこう語った。

コーチ山崎は、自分のバスケットボール知識の多くはアメリカのコーチたちから得たものだと言った。彼が現在用いているモーションオフENSESの原点は、インディアナ大学のボビー・ナイトのビデオである。おそらく、百回ぐらいい見ただろうと彼は言った。彼は、パデュー大学のジーン・ケイのゾーンオフENSESにも非常に興味を持っているとも言った。そして、彼の今回の自慢は、ショッピングモールで買ったラリー・バードのコーチ・オブ・ザ・イヤー記念Tシャツと、インディアナ大学のマークがデザインされた腕時計だとも言った。

彼はこう言った。日本の女子バスケットはアウトサイドシュートが得意だったので、国際的にある程度の成果を収めてきた。しかし、日本のバスケットは男女を問わず、インサイドプレーには弱い。だから、ポディーコンタクトの多い男子の試合においてはそれが致命的な欠陥になる。

「日本のバスケットはアウトサイドのシュートを重要視するが、アメリカのバスケットはインサイドプレーをとっても重要視する。そして、インサイドのポジションニングが巧いし、また、インサイドへのパスも巧い。これは、日本の選手たちが参考にして身につけなければならぬプレーです」

と彼は言った。これだけ多くの選手たちをアメリカに連れてきたのは初めてだが、選手ひとりひとりが大きな収穫を得たのでよかったと、コーチ山崎は喜んでいる。

「もっと多くの選手たちがここに来るといい」

「これまでたくさんコーチたちがアメリカにやって来て、多くのことを学んで帰りました。でも、コーチだけでなく、選手自身が来て、肌で感じなければわからないことがたくさんあるのです」
コーチ山崎はそう語った。

コーチ山崎の教え子の一人である大野慎子は、英語力をつけるためにエバンスビル大学のESL(ENGLISH AS A SECOND LANGUAGE)研修コースを修了した。今シーズン、彼女はエバンスビル大学でプレイすることになるだろう。エバンスビル大学は、大野慎子がNCAAディビジョンでプレイする日本人女子選手の第一号になるだろうと信じている。

「私は、大野慎子が環境の変化に慣れるだろうかと少し心配でした。特に、身長が低いことで苦労するのではないかと心配していました。でも、コーチ・ベネットの心と大野の心はぴったり相性が合うので、その点では成功するのではないかも思っていました」

コーチ山崎はそう語った。

ヒリー氏は、日本の男子チームもいくつか今回連れてきた。彼等もまた、地元のAAU(選抜)チームと試合をした。彼等は、エバンスビル大学の卒業生であるコーチ・マークに指導を受けた。

「フロアー上の五人に何かを指導している時、周りで見学している選手たちはよく注意を払って見ており、指導者の意図を充分理解しているので、交替させて指導をする時にとってもスムーズに指導できます。これは高校生レベルではめずらしいことです」

コーチ・マークはそう語った。しかし、コーチ山崎が指摘したように、日本の選手たちはボールをインサイドに入れることを好まない。

「日本の高校生の試合はともソフトです」

「我々が強調することのひとつは、何事も攻撃的であれということです。誰かを突き倒したら、その選手を立ち上げさせるために手を貸す必要はありません。自分のプレイを続けていいのです。でも彼等はともも礼儀正しくて、すみませんと言って相手を助け起こします」コーチ・マークはそう語った。

コーチ山崎は、自分同様、選手たちもとても楽しんでくれているといいのだがと思っている。

「私はアメリカに来てたくさんさんの有名なコーチたちに逢って勉強しました。その中でも、コーチ・ベネットは特別です。彼女はバスケットボールに対する愛情と情熱に満ちあふれています」

コーチ山崎はこう語った。キャンプはエバンスビル大学のカーソン・センターで日曜日まで行われる。

慎子は、この遠征の一ヶ月半前に、TOEFLとSATをクリアし、晴れてエバンスビル大学のバスケットボール奨学金選手として入学することを許可された。そこへ懐かしい日本から、後輩や知り合いのコーチたちがやってきたのだ。慎子でなくとも嬉しくて嬉しくてたまらないはず。それが態度に現れないわけがない。慎子は本当に張り切っていた。ガイさんは、慎子のことを「GYM RAT」と言ったが、慎子は本当に一時もじっとしていなかった。というより、じっとしていられなかった。その様子は報告書のとおりである。

何より忙しいのが、慎子がちょっとでも暇ができたら、九六人の日本の選手が入れ替わり立ち替わりサインを求めてくるのに応対してやることだった。しかし慎子は笑顔を絶やさず、ひとりひとりの求めに丁寧に答えていた。私はそんな慎子を見ていて、話したいことはたくさんあったが、できるだけフリータイムを作ってやるために、慎子に話しかけるのを控えた。そのような私の態度を見て、「山崎先生は冷たい」と思った人がいたかも知れないがそうではない。独り占めしたいのは山々だが、誰もが独り占めしたがっていたので遠慮しただけだ。しかし、その遠慮がもつて私は最後に大失敗をしてしまった。

キャンプが終わった。いよいよ出発だ。飛行機の出発時間の関係で、寮をチャーターバスで出発するのが明け方の四時。私たちは、三時半頃から宿泊所のプレントナーノホールの脇で、チャーターバスに荷

物を積み込んだり人数の確認をしたりして忙しく動き回っていた。アシスタントコーチのスウェンソンと慎子も、早くからホールに来て何かと世話をしてくれていた。すっかり準備が整い、みんなバスに乗り込んだ。私はバスに乗り込む前にスウェンソンに礼を言った。

「君たちの熱意には心から感謝しているよ。ほんとうにありがとう。来年は君たちが長崎に来るんだろ？その時はバッチリ面倒見るからね。じゃ長崎で待ってるよ」

そして私はバスに乗り込む。窓の外を見た。スウェンソンと慎子が手を振っている。慎子は泣いていた。「ア！ 運転手さん、ごめん忘れ物した！ ドアを開けてください」

私は、一旦閉じられたバスのドアを開けてもらうと、すっ飛んで慎子のところに行った。

「ごめんごめん、慎子にさよなら言うの忘れてた」

私は慎子を抱きしめて、ごめんごめんと何度も言った。慎子にお別れの挨拶をして再びバスに乗り込んだが、バスの中でガイさんから「コーチ、シンコニ サヨナラ ワスレテイタデシヨ」と言われた。ガイさんの顔は怒っていた。

日本を発ってから一年四ヶ月ぶりに、晴れてエバンスビル大学に入学を許可され、そして久しぶりに会う日本のバスケット仲間。この一〇日間は慎子にとってどんなに楽しい日々だったか、そしてこの別れがどんなに寂しいか、そんなことを氣遣ってやれなかった自分をとても反省した。コーチスウェンソンをはじめ、大学側の関係者にお礼を言うことばかりに氣を取られていて、本当にうっかりしていた。そんなわけで、最後に大失敗をしてしまったが、私たちの第二回目のアメリカ遠征はとても充実した内容で幕を閉じた。あとは第一章で述べたように、慎子活躍情報の連発となるのである。

二 キャンセル

一九九九年一月。ガイヒーリージャパンの企画により、エバンスビル大学女子バスケットボールチームの日本遠征が決定した。期間は、五月二日から三一日までの一〇日間。場所は長崎市。会場は鶴鳴学園長崎女子高校。内容は次のとおり。

- 二一日 福岡着（福岡泊）
- 二二日 コーチクリニック。
- 二三日 模範試合 エバンスビル大学 対 ジャパンエナジー
- 二四日 同じく
- 二五日 同じく
- 二六日 親善試合 長崎成年女子国体チーム
- 二七日 観光
- 二八日 観光
- 二九日 選手クリニック
- 三〇日 同じく
- 三一日 移動（福岡へ）

この内容は、ガイさん、北さん、それに私の三人が同席し、県庁の記者クラブで発表した。だからマスコミにも、『大野慎子凱旋帰国』などという見出しで大きく取り上げられた。しかしそれは、三月中旬にキャンセルになった。理由はエバンスビル大学が勝ち進みすぎたからである。

それまでのエバンスビル大学は、四年連続カンファレンスの最下位であった。だから、カンファレンスリーグが終了する二月下旬以降は、通常ならばオフになる。ところがこの年のエバンスビル大学は、

第一章でも述べたように、カンファレンスリーグで四位になってカンファレンストーナメントに出場しただけでなく、カンファレンストーナメントで優勝し、さらに、カレッジスポーツの最高峰であるNCAAトーナメントに出場することになったのである。NCAAトーナメントではさすがに初戦で敗退してシーズンを終了したが、当初のシーズン終了予定より約二週間の遅れとなった。

ただか二週間の遅れぐらいなんでもないと私は思ったが、日本の感覚とアメリカの感覚は違う。まず選手たちの授業の受講がそれによってずれ込む。スタッフにとっては、リクルート関係の仕事が大幅にずれ込む。選手にも休養の期間を与えてやらなければならぬ。日本では簡単に済まされそうな問題でも、アメリカではそうはいかない。だから、五月下旬の日本遠征までにはそれらの問題が片づかなくなってしまう、やむなく五月の遠征は中止となり、翌年の夏に延期となってしまったのである。

しかし慎子は、チームとしての遠征がキャンセルになっても、この年のオフは帰国することに決めていた。帰国についての具体的な連絡が私に入ったのは四月二日だった。

五月 六日 エバンスビルを発ち、シカゴ・成田経由で伊丹へ。七日夕方伊丹着。

八―一〇日 福岡 友人

十一―十五日 佐世保 母親実家（祖母宅）

十六―二一日 長崎 鶴鳴・友人・取材

二二―二六日 東京 友人・取材・体力測定

二七―二九日 名古屋 友人

三〇― 五日 伊丹 母親宅

六月 六日 伊丹を発ち、成田・シカゴ経由でエバンスビルへ

この連絡を受けた翌々日からエバンスビル出発直前までの慎子は、学年末の試験を一〇回受けなければならぬ。私はまた、雅子と共に、二月にエバンスビルを訪問した時のことを思い出した。あの時慎子は、無二の親友と二年ぶりに会ったのに、その無二の親友を傍らに置いて、自分は翌日の授業の予習をしていた。単に、翌日の授業の予習ですらそうなのに、今回は試験である。教科書を読む程度では済まないだろう。通常でさえ床に着くのは夜中の一時くらいなのだから、試験となれば二時とか三時、或いは徹夜という日が続くに違いない。

日本の新聞やテレビで報道される慎子は、バスケットボール選手として如何に活躍しているかという点にスポットを当てられている。しかし、その基盤となる学生生活は大変なのである。いや、もっと的を絞らなければならぬ。学生生活ではなく、毎日の勉強が大変なのだ。大変なのだというと、学生生活が苦痛になっているように聞こえるがそうではない。慎子は、アメリカでの生活を大いに楽しんでゐる。寮の生活も、友達……というよりアメリカの人々も、バスケットも、環境も、すべてが大好きなのだ。ただ勉強だけが苦痛？ いやいやそうではない。勉強は嫌いでもないし苦痛でもない。ただ、アメリカの大学の授業は、しっかり予習しなければいけないし、出席の返事をして、学期末にレポートを提出すれば単位がもらえるような授業はない。しっかり内容をつかんで自分のものになければならぬ授業ばかりなのだ。慎子の英語力はまだまだ未熟だから、他の学生よりも予習復習に多くの時間をとられる。そういう意味で大変なのである。

私は、慎子のアメリカでの学生生活の様子を知るにつけ、日本の学生がかわいそうになってきた。日本の学生は、大学に入るために猛勉強をする。その結果、ランキング上位の大学に入ることができたら、ほっとして気の抜けた学生生活を送ってしまう若者が多い。それは、日本の社会における人物評が、本人がどのような人格を持ち、どのような学問を修得したかという観点からではなく、ランキング何位の大学を出たかによって決まるといふ風潮が、まだまだ残っているからだろう。アメリカでももちろん、

どの大学を卒業したのかという学歴は、本人のキャリアに大きな影響を与える。しかし、その個人がどのような人物で、どのような学問を修めたかということ、日本よりもはるかに大事にすることは間違いない。

第一章で登場した慎子の大ファンのウィリー。彼は、一年生を終了したが二年生は休学する。故郷のテネシーに帰ってアルバイトをしながら、自分の人生を見つめ直してみるのだそうだ。もちろん、大学を中退する気はまったくくない。これから先の大学での専攻科目をしっかりと考え直すのである。幼い頃から、彼はイギリスの大学に渡って宗教関係の勉強をしたいという気持ちを持っていた。そのことについても、エバンスビル大学で教養課程を終えた一年目に、しっかりと考えてみてから次を決めようというのだ。自分の人生をしっかりと考えるための一年間。それはウィリーにとって、決して足踏みの一年間ではないのである。

三 振り袖

慎子が成田に着いたのは五月七日の午後。二年二ヶ月ぶりの帰国だ。それからの慎子は目が回るように忙しかった。親戚や友達は、一言でもいいから慎子と話したい、ほんのちょっとでもいいから会いたいと思ひ、手ぐすねひいて待ちかまえている。それに取材があり挨拶回りがある。その中で、慎子ももっとも大事にしていたのが友達と会うことだった。高校時代の友達は、東京・名古屋・福岡と分散しているが、日本に居る間に一人でも多くの友達と会いたい。慎子は高校時代からファンが多く、その子たちからも予約が入っていた。だからその子たちとも会わなければならない。私は、慎子が到着した日に彼女のスケデュールを聞き、その日のうちに、飛行機・新幹線・乗用車等、すべての交通手段の手配を済ませた。母親の美智子さんは、慎子の忙しさを予測して、レンタル携帯電話を慎子のために用意しておいてくれた。これが大変役に立った。

そんなに忙しい慎子だから、エバンスビル訪問の時と同様、私は慎子のプライベートタイムを拘束することを避けた。しかし、慎子が長崎入りする五月十六日の午後だけは、どうしても拘束しなければならなかった。それは、四ヶ月遅れの慎子の成人式記念撮影を用意していたからだ。通常、成人式記念撮影や、結婚記念撮影は、写真ができあがるまでに約一ヶ月かかる。慎子が日本に居る期間は約一ヶ月あるが、そのうち長崎に滞在する期間は約六日間しかない。写真はその間に出来上がってしまったければならない。もちろん、後日郵送するという手段はあるが、できることなら、国内移動中にも友達に見せたりしたいだろうから、長崎を発つ時には持たせてやりたい。私は、学校出入りの写真館に出かけていつて頼んだ。

「卓二さん。四ヶ月遅れだけど、成人式の写真を撮ってもらいたい子がいるんだ」

「ああ、いいですよ」

「バスケットの教え子でな、先日二年ぶりにアメリカから帰って来たんだよ」

「ああ、あの子ですか」

「これから日本中の友達と会うんだ。同級生はみんな一月に成人式を済ませているし、それぞれ写真を見せあったりすると思う。だから、長崎を発つ時にはどうしても彼女に持たせてやりたいんだよ」

「わかりました。予算はどれくらいですか？」

「みんなと比べて見劣りのしないもので頼むよ」

「わかりました。先生もママですなえ」

「いや、俺でなきゃならない理由があるんだよ」

「なんですか」

「実は、本人もお母さんもな、成人式をやってないからというので、日本に居る間に、貸衣装を借りて写真を撮ろうと計画してたらしいんだ。それを、『それは俺がちゃんと用意している』ってんで横取りしたのさ」

「なぜ？」

「だって、そんな写真って、ちゃんと撮影して仕上げると一ヶ月くらいかかるんだろ？」

「まあ、そんなもんですねえ」

「それがそんなに待てないんだ。彼女はすぐ長崎を発つんだよ」

「何日くらい居るんですか？」

「十六日に撮影してもらうだろ。そして二日には発つんだ」

「エ？ という和二日までの仕上げ？」

「そつ」

「先生も無茶言つなあ」

「な、だから普通の写真屋さんじゃダメなんだ。俺がこうして無理を頼める卓二さんでなきゃ……」

「そんなこと言つたって……十六、十七……五日間で仕上げかあ。ウーン……先生……どうしても持たせてやりたいんですよ。郵送じゃだめなんですよ」

「だからこうして頼みに来たんじゃないか」

「そつだろな……ウーン……ま、先生の頼みだからな。やるよ、五日で」

「頼む。よろしくな」

私は、卓二さんの承諾を得てすぐ、今度は布志木純子にも頼んだ。彼女は第一章「OSHKOSH」で登場した、「あのブーツ欲しかった」を二年間言い続けていた旧姓小島純子である。彼女の母親は、日本舞踊藤間流の名取りである。その関係で、対馬から二ヶ月に一回くらいの割合で長崎まで出かけてくる。私は布志木に電話をかけた。

「おまえのおかあさん。時々踊りで長崎に出かけてくるよなあ」

「はい」

「今日は十六日に出て来てくれないかなあ」

「え？ どうしてですか？」

「おまえのお母さん、踊りをやるから着物の着付けは得意だろ」

「はい」

彼女は、慎子が久々に日本に帰ってくることを知っている。

「実はな、慎子の成人式をしてやりたいんだ。でも着物の気付けって高いだろ。それでおまえのお母さんに頼めないかなあと思ってさ」

「ああ、いいですよ。でも着物はどうするんですか？」

「それも考え中なんだけど、貸衣装借りれば高いよなあ」

「高いですよ」

「おまえ、お母さんの関係で何か伝手はないか」

「そつですねえ……ウーン、もしかしたら妹が実家にあるかもしれませんよ。妹の成人式の時に、お母さんが一式揃えましたから。それ、聞いてみましょつか？」

「でも体格が合うかなあ」

「妹は一六八センチですが慎子ちゃんは？」

「一六二」

「いいじゃないですか。着物は腰で調節しますからなんとかありますよ」

これで着物と着付けと写真館は間に合った。あとは美容室だ。これもついでに、布志木が行きつけの美容室に予約を入れてくれて準備はすべて整った。慎子の四ヶ月遅れの成人式は、終日地元NHKがカメラを持って取材で追いかけた。私はその日は一日中、チームの医科学体力測定だったので手が放せず、実際の様子は見ていないが、後日ビデオですべて見せてもらった。

慎子が美容室で化粧をする。眉が、まつげが、美容師がちょっと手を入れると変わっていく。口紅をさす。髪を結び上げる。コートではいつも慎子は輝いている。しかし、それとは別の輝きを持った慎子の顔がそこにあった。それから写真館に移動する。着付けが始まる。着付けをしている最中も、慎子の携帯電話は鳴りっぱなしだ。友達からの連絡なのだろう。やがて着付けが終わり、撮影が始まる。立ったり、椅子に腰掛けたり、カーペットの上に乗ったりと、さまざまな形で撮る。結婚式にしる成人式にしる、撮った写真を見たことは何度もあるが、化粧から髪結い着付け撮影と、すべての過程をこうして見たのは初めてである。慎子の生涯に残るこの日を、最高に幸せなものにしようと演出する卓二さんや布志木のお母さんの顔が、時々画面を横切る。二人とも額に汗がにじんでいる。私は、慎子の晴れやかで幸せそうな顔だけでなく、周囲で立ち働く人々の、そうした動きを見ていても感激した。

撮影後、NHKの長野アウンサーが私に取材を求めた。

「先生、大野さんが帰国したら真つ先にしてやること。それが四ヶ月遅れの成人式だったわけですが、それはどんなお気持ちからだったんですか」

「だって、同級生はみんな一月に済ませてるんだぞ。しかも、女性がこうして、一生の記念撮影をするのは成人式と結婚式ぐらいだろ。それも、結婚の記念撮影は、やろうと思えば一生に二回でも三回でもできるぞ。でも、二〇才の記念撮影は、二〇才の時できなきゃできないだろ。二〇才ってのは一生に一回しか来ないぞ。何回も来ないんだぞ。だから、この帰省を逃したら、もう二度とチャンスはないじゃないか」

私は、この仕事が美談として取り上げられるのが照れくさかったので、冗談交じりにそう答えたが、これは何をさしおいても絶対に実現させたいイベントだった。なぜなら、慎子のアメリカでの苦労は大抵のものではない。人生の荒波を乗り切った二〇才の慎子の記念を、誰にも負けない立派なものにしてやりたいと思うのは、私に限らず慎子に関わった者なら誰もが持つ気持ちだろう。

二二日、私は出来上がった写真を受け取りに行った。私は、写真のことはわからないので仕上がりのスタイルは卓二さんにすべて任せていた。私が想像していたのは、立っている慎子と座っている慎子で見開ききの二ポーズだと思っていたが、出来上がっていたのは三枚組だった。

「成人式の写真って三枚組が普通なの？」

卓二さんはここにこしながら答えた。

「一枚は私からのプレゼントです」

つまり、二枚組が普通で、飛行機で言えばエコノミークラス。それでも充分なのだが、卓二さんはそれに自分の思いを込めた一枚を加え、ファーストクラスで仕上げてくれたのだ。



代金を払おうとした。安い。

「え？こんなに？」

「二ポーズの値段で、それから 割値引きしています」

卓二さんは慎子のことは噂で知っているし、そのことで、私がかここまで走り回っていることが気に入ったのだ。だから感激して大サービスしてくれたのである。きつと卓二さんは、一生儲からない写真館を続けていくにちがいない。

写真は三部仕上げてもらった。二部は分厚い表紙つきの正式なもの。他のひとつはスナップ写真である。正式なものは、一部を慎子がアメリカに持って行くためにプレゼントした。もう一部は伊丹に住んでいるお母さん用に、スナップ写真は対馬からわざわざ出てきてくれた布志木のお母さん用に、それぞれ郵送した。こうして慎子は、関わった人々の思い入れがいっぱい詰まった二〇才の記念写真を大事に持って、またアメリカへ旅立っていった。

四 開幕

慎子が五月に里帰りした時の取材では、どのメディアからもこれからの抱負を聞かれた。そしてどのメディアも、MVPとかWNBAへの挑戦ということばを欲しがった。そんな質問に対しての私の答えはいつも同じだった。

「身内というのは希望よりも心配の方が先なんです。優勝とか個人タイトルなんて考えてもいません。来年も試合に出して貰えること。ただただそれを願うだけです」

「みんな同じことを聞くんですよ。こっちは今年も試合に出してもらうことだけしか考えてないのに」
慎子もまた同じことを言った。

バスケットボールが上達するかどうかという問題だけではない。学業というハードルがいつも立ちふさがっているのである。慎子は、五月下旬に再びエバンスビルに戻ってサマーの講義を受けた。スポーツ選手は、シーズン中は遠征などで授業が欠けることがあるので、こうして夏休み中に聞かれるスキルを受ける場合が多い。そしてスクールは、受けるだけでなくちゃんと試験がある。慎子はその年の夏、私たちが遠征した、ウイスコンシン大学リバーフォールス校のキャンプを手伝いに来る直前まで、スクールと試験の連続だった。

昨年、正式入学後の慎子の最初の試験の成績は、Aが三科目とBが三科目だった。日本の五段階評価通知表に直せば、五が三科目と四が三科目というところだろう。優秀である。ところが今回の試験はいぶん難しく、また科目も多かったようで、CもあつたしDもあつた。Dは 付きのDだったので、補習や追試の対象にはならずは無事進級できたが、日本語の問題ならば鼻歌まじりで解ける問題も、英語で出される問題なので、微妙なニュアンスを取り違えたり、落とし穴に引っかかったりで、油断がならないのである。(十一月の学期末試験は挽回し、またAとBばかりだった)

さらに私気がなったのは、エバンスビル大学の新生である。エバンスビル大学は、昨シーズンの最下位から一挙にカンファレンスチャンピオンにのし上がったチームなので注目を浴びている。だから、優秀新人が自己推薦で入ってくることも考えられる。そうすると慎子の出番が怪しくなってくる。私はインターネットでエバンスビル大学のリクルート情報を調べた。そこには三人の優秀新人のプロフィールが掲載されていた。三人とも一八〇センチ以上の選手だ。私はコーチBにメールを送って聞いた。

「インターネットで調べましたが、今年は優秀な新人が獲得できたようですね。いかがですか？」

コーチBからすぐ返事が来た。

「今年の新人は、三人ともとても態度がいい選手です」

キャシーもコーチBも、人間重視タイプのコーチである。だから観察も評価も、技術や体力ではなく精神面や態度を重視する。しかしコーチBのメールは、新人選手のことについてはたったそれだけで、あとは慎子のことばかりだった。

「慎子はまたうまくまりました。パスやシュートはますます安定してきましたし、それに加えてドリブルがうまくなりました。昨シーズンはドライブで切り込んで行ってもシュートミスすることが多かったのですが、今年はドリブルでの前後の揺さぶりに磨きがかかり、他の選手が慎子を捕まえるのに四苦八苦しています。それよりも、慎子の精神的な強さは私たちにとても大きな影響を与えています。頼もしいかぎりです」

私はホツとした。慎子は今年も試合には出られそうだ。コーチBのメールはさらに続く。

「ところで、リバーフォールスでの試合のビデオを見せてもらいました。番の選手、いいですねえ。コーチ山崎はエバンスビル大学には誰を推薦するんですか？」

私はすぐにメールを返した。

「今のチームの中には、エバンスビル大学に推薦してやれる選手はいません。どの選手も、現在精神面の問題を手直し中です。それも、直ったからといってそれが慎子のレベルまで到達するかどうかもわかりません」

キャシーもコーチBも、コーチ山崎なら、慎子のような選手を次々と育て上げるだろうと思いいこんでいるのである。そんな人創りが簡単にいくのなら、県大会で負けたりしない。

コーチBが指摘したのは重村典子だった。彼女は確かにチームで一番積極的な選手だ。しかし、まだ自分のことしか見えないという弱点を抱えたままである。それは慎子が入ってきた時とまったく同じだ。だから慎子は危なくて使えない選手だった。それがやがて、自分の積極性は保ったまま、他の選手のプレーもちゃんと見えるようになっていった。だから典子も、二年生になればきっとそうなると言えるかというそれはわからない。典子の前にはまだまだたくさんハードルが待ちかまえているのである。

五 iモードメール

メールのことを話そう。私は今年になってから携帯電話をiモードに変えた。普通の携帯電話やポケットベルは、ショートメールといって、話す以外に簡単な文章で連絡がとれるが、それはせいぜい全角で二五文字程度だから、「少し遅れる」とか「先に行つて」など、ほんの一言ぐらいしか書けない。iモードというのは、ちゃんとプロバイダー契約をして、メールアドレスを作つて通信をする携帯電話である。それは、本物のパソコン並とはいかないが、全角で二五〇文字、半角なら五〇〇文字までの文章をやりとりできる。だから、「朝夕はめつきり冷え込み…」などと余分な季節の挨拶をせず、用件のみ伝えればいいのであれば、充分意思を伝え合うことができる。しかも、パソコンのEメールなら外出や遠征から帰つてからしか見ることができないが、iモード携帯は日本国中どこに居てもその場でメールの送受信ができるのである。

私が携帯電話をiモードに変えたのは、慎子と連絡を取り合うためだ。私の携帯電話は、国際電話ができるように登録してある。それも慎子と連絡を取るためである。慎子にはコレクトコールでかける言つておいたが、寮の電話はコレクトコールはかけられない仕組みになっているので、通常の方法でかけなければならぬ。だから私は、慎子から電話がかかるとすぐそれを切らせ、こちらからかけ直すことにしていた。しかし携帯電話からの国際電話は料金が安い。だからどうにかしなければならぬと思っ

ていたところへ、ちょうどいいタイミングでiモードが開発されたのである。

さらに一〇月上旬には、最新式のデスクトップコンピュータを購入した。これはインターネットで慎子情報を少しでも早く入手するためである。それまでは、ガイさんがインターネットやEメールで入手した情報を横流ししてくれていたので速報とはいかない。しかも、ガイさんが長期の出張になるとお手上げである。慎子の二シーズン目が始まる前に、私はiメールとEメールとインターネットがいつでも自由に自分で操作できるようになった。もう大丈夫だ。

iメールになったことで、慎子との連絡回数は一気に増えた。慎子自身もお金のことが気になって、私に国際電話をかけるのは、よほど急ぎの用事が重要な連絡事項でないかぎり控えていたのだろう。iメールだと、日本国内に送信するのもアメリカに送信するのも料金は同じ料金で、しかも電話代に比べるとかなり安い。もう何の気兼ねも要らないのである。慎子とのやりとりはもちろん英語。アメリカのパソコンには日本語のワープロソフトは入っていないので、英語でしか通信できないのである。私の文章には文法的な間違いや誤字脱字がたくさんあるだろう。が、慎子とやりとりした内容で「意味がわかりません」という返信が来たことはない。充分おたがいの意思は伝え合うことができる。

それにしても、日本人同士が英文でメールのやりとりをするのだからこっけいななはなしである。はじめの頃は、慎子も私も部分的にローマ字で書いてみようか試みたことがある。例えば「SENSEI GENKIDESUKA?」というぐあい。しかし、かえってその方が神経を使うし文字数も多くなる。だからすぐにそれはやめた。

iメールは、最初は慎子専用だったが、しばらくするとコーチBが仲間に入るようになった。コーチBは、私に英語でメールやファックスを送るのは控えていたのである。何か私に伝えたいことがあれば、コーチBはガイさんあてにメールかファックスを送り、ガイさんが私に伝えるという仕組みになっていた。ところが、慎子とのやりとりを見たり聞いたりしていたコーチBは、私に英文で直接連絡しても大丈夫だとわかったのである。一〇月に入ると慎子は、練習と授業でまた深夜族生活になる。だから私の携帯電話には、コーチBからのメールの方が慎子よりも多くなってしまった。一〇月一六日。コーチBは次のような内容のメールを送ってくれた。

「たぶん、ほとんどの人が気付いてはいないと思いますが、私はミズーリバレーカンファレンスでは、間違いなくサウスウエストミズーリステイトのジャッキー・スタイルスと慎子の二人が、最高のガードプレイヤーだと思います」

一〇月十五日の深夜十二時、即ち十六日の午前〇時。これをアメリカの人たちは、ミッドナイトマツドネスと呼ぶ。この日は、「コーチと選手が一同に会して練習することはまかりならん」という、NC A Aルールの解禁日なのである。コーチBは、ミッドナイトマツドネスの練習を終えた後、オフィスに戻って一人一人の選手の顔を思い浮かべ、今シーズンの構想を描きながら、このメールを送ってくれたのだ。どうやら今シーズンも慎子はスタメンで出場できそうである。